小阿地地区遺跡分布調査概報

(坂ノ上遺跡)

秋田市四ッ小屋小阿地

1975.3.

秋田市教育委員会
秋田考古学協会

序

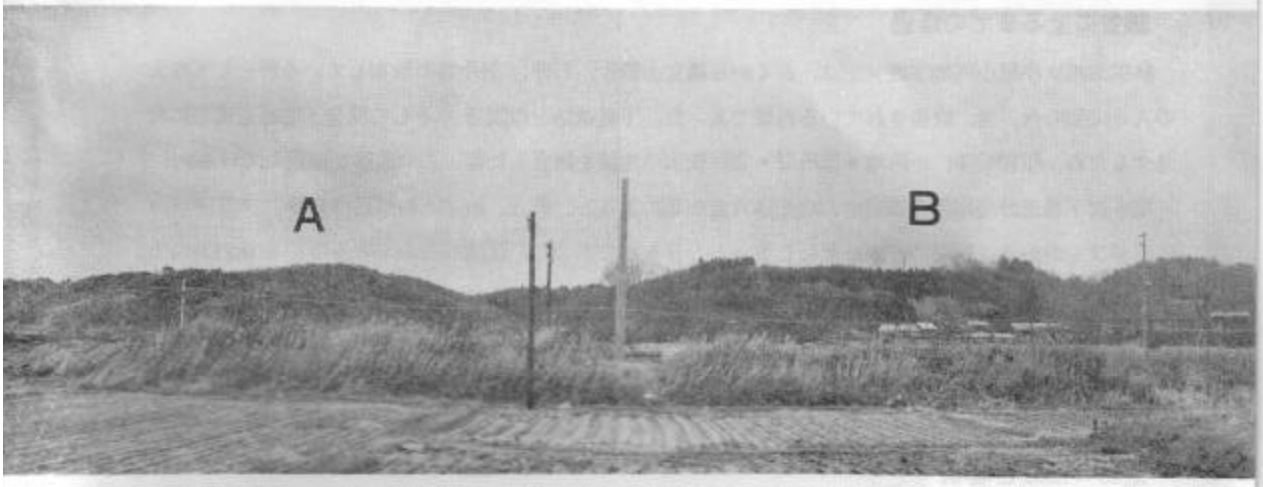
秋田市の遺跡三大密集地帯の一つ、四ツ小屋小阿地において、文化財保護の立場から開発に対処してすでに7年を経過した。

過去6年間は下堤遺跡の調査、そして今年度はその南に接する台地、字坂ノ上において遺跡の分布とその性格を把握するための調査を行なったのである。実施にあたっては、さいわい、国、県、その他関係団体、大学、高校等のご指導とご援助をはじめ、地元関係土地所有者の積極的なご協力をいただき深く感謝申しあげる次第である。

本概報が文化財保護のため、さらに、先史時代研究のために広く活用されることを念願するものである。

昭和50年3月

秋田市教育長　佐　藤　博　之



遺跡遠景　　A：下堤遺跡　　B：小阿地地区（坂ノ上）遺跡

遺跡の位置　　A：下堤遺跡　　B：小阿地地区坂ノ上遺跡　　C：小阿地地区（坂ノ上）遺跡・古墳
D：地方遺跡（縄文時代晩期）　　E：地蔵台遺跡（弥生時代）

調査に至るまでの経過

秋田市四ツ小屋小阿地字坂ノ上は、古くから縄文土器片、石器、剥片等の散布している所として地元の人々に知られ、又、収集されている地域であった。下堤遺跡との関連、そして開発、宅地造成等に対処するため、昭和43年、小阿地・御所野・末戸松本の地域を踏査した際、この遺跡を確認している。

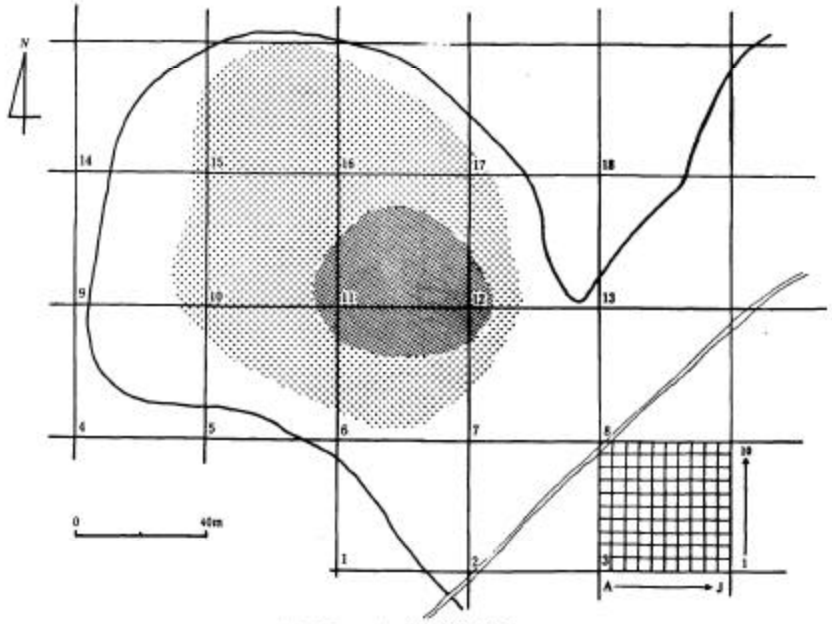
第6次下堤遺跡発掘調査期間中、地元協力者の話によると、最近、坂ノ上の畑耕作の際、トラクターに石がひっかかり、耕作に支障をきたしていると言う事であった。現地へ行ってみると、畑地内外に土器片、石（小～大）等が多量に散布し、縄文時代中期末～後期にかけての配石遺構の存在が考えられ、下堤遺跡の調査は第6次で一応終了する予定であったので、昭和49年度は小阿地坂ノ上遺跡の範囲確認を中心に調査することにした。（菅原）

遺跡の位置と現状

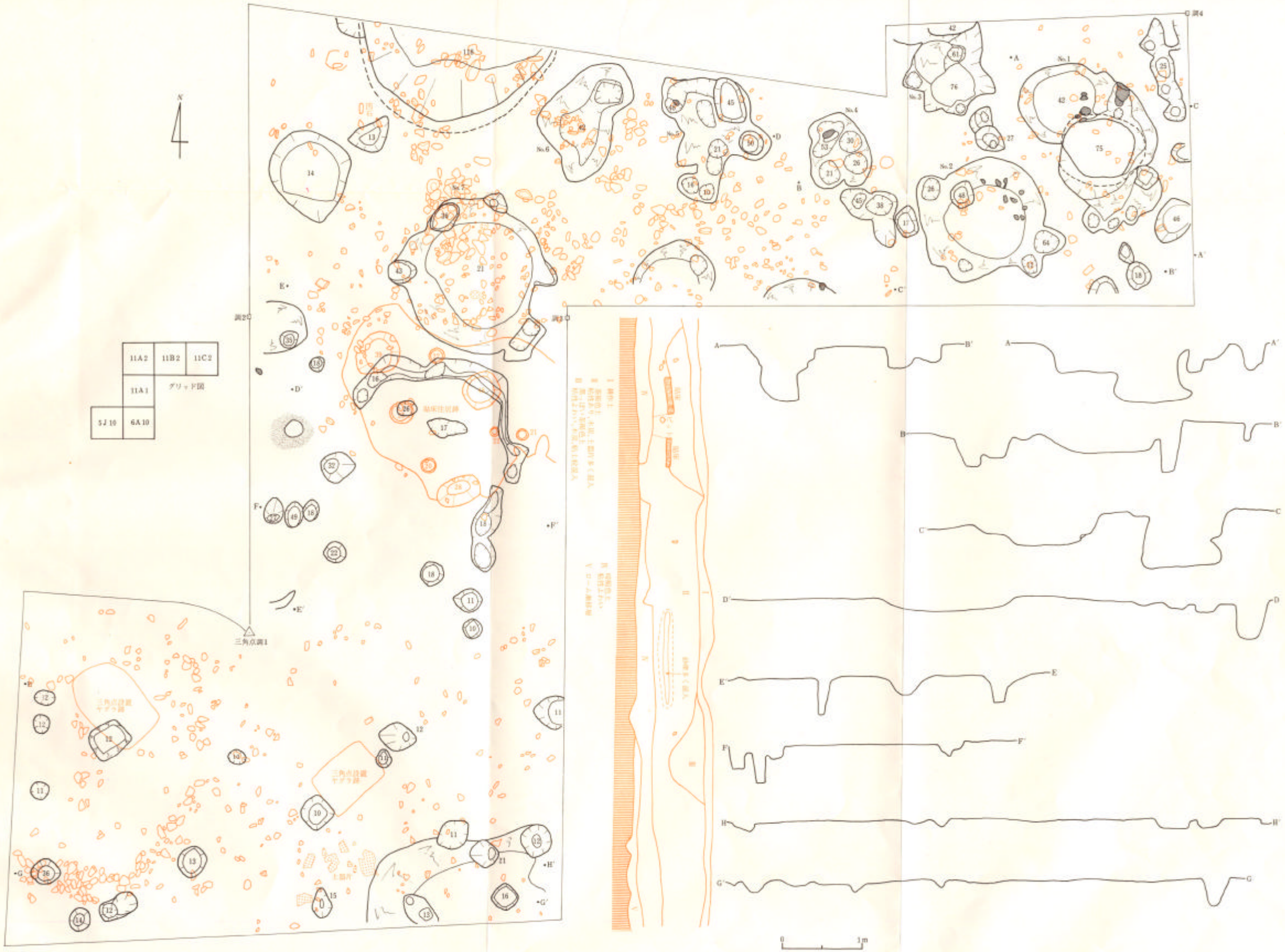
下堤遺跡と沢一つ隔てた南側の台地が、小阿地坂の上遺跡である。遺跡は、秋田市から直線距離にして東南へ約7㎞、奥羽本線四ツ小屋駅より東へ約0.5㎞の所に位置する。遺跡の西南約2㎞には太平山に源を発する岩見川と雄物川との合流点がある。

調査区には標高41mの三角点があり、舌状台地を形成し、この調査区を東西に国道13号線に通ずる農道が走っている。三角点を中心とする約1,500㎡は、戦後、開墾された所で現在は畑地である。

（菅原）



第1図　グリッド設定図、および遺構分布図



三角点周辺遺構平面図　住居跡・小竪穴・土壙　配石遺構平面図

目的と方法

三角点（標高41m）を中心に約30,000m²の区域に40×40mの大グリッドを18設定し、この調査区域をA地区とした。

この台地上に23ケ所の2×2mグリッドを設け、A地区の遺構の範囲確認を行ない、特に三角点周辺は遺物の散布が多いため4×4m（東西A～J、南北1～10）グリッドを11ケ所調査し、遺構の分布範囲確認の他に遺跡の性格等を把握するため発掘調査を実施した。（菅原）

遺構と遺物　（ ）内グリッド

A　地区貼床住居跡（11A1）

三角点の北東方向に位置し、表土より30～40cmの深さで確認された貼床住居跡で、貼床の厚さは5cm前後、床面の状態は良好であった。この住居跡は北側の配石遺構により、こわされている。住居跡全体の規模は径にして約4～5m程と考えられるが住居跡のプランは不明である。柱穴も含めピットは8個確認できた。深さ28cmのピットの貼床下より骨片が出土している。炉は未確認である。

A　地区住居跡（11A1）

前記の貼床住居跡下に確認された住居跡でローム面に造られている。プランは、はっきりしないが浅い溝が東側にみられ、この住居跡の周溝と考えてよさそうである。炉は西側に傾斜する埋甕炉（埋甕土器、大木10式）をもつ、三角点から約30cmの所に巾10cmのロームの盛り上りが残っているが、この住居跡の壁かどうかは不明である。

※調査期間中、大木10式の埋甕が抜き取り盗難に遭い、E～E′の断面図には炉の掘り込みだけ記載してある。

小竪穴遺構・土壙（11A2・11B2・11C2）

No. 1　（11C 2）

北西方向に長軸（225cm、短軸120cm）をもつ楕円形で、中央部に径約90cmの掘り込みがあり袋状を呈している。この小竪穴の2ケ所から骨片が出土している。深さ41cmのピット内から土器片出土。

No. 2　（11C 2）

径約150～160cmのほぼ円形の小竪穴で、ピットの部分が張り出している。深さは40cm前後で、骨片が出土している。

No. 3　（11C 2）

全面調査はしていない。No. 2小竪穴の北側に位置し、不整形のようであるが全体的に深い遺構である。深さ42cmのピットから土器片出土。

No. 4　（11B 2）

ほぼ楕円形（リンゴの断面形、長軸100cm、短軸75cm）で最も深い部分に石があり、土器片が出土している。

No. 5　（11B 2）

不整形（長軸150cm、短軸100cm）で西側の深さ48cmのピットから石と土器片が出土。

No. 6　（11B 2）

不整形で深さは42cm前後である。

No. 7　（11A 2）

円形（径180cm）でピットの部分が張り出している。浅い鍋底状の小竪穴で、骨片が出土している。

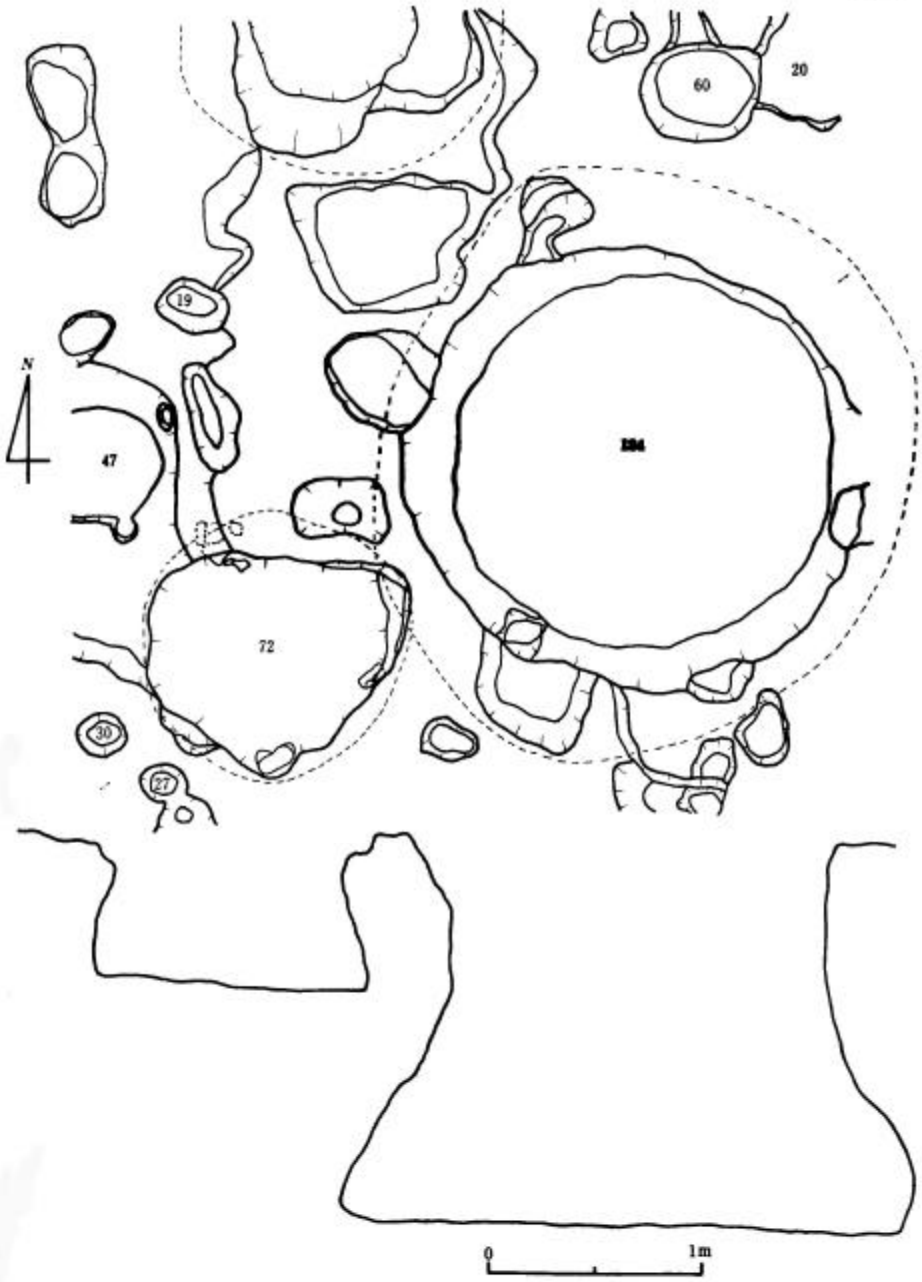
No.1～No.7　小竪穴遺構の層について

小竪穴の層については判別のできる層序はなく、配石面から底部まで暗褐色土の焼土、炭化物、土器片、ローム混りで石を含む層が主体である。

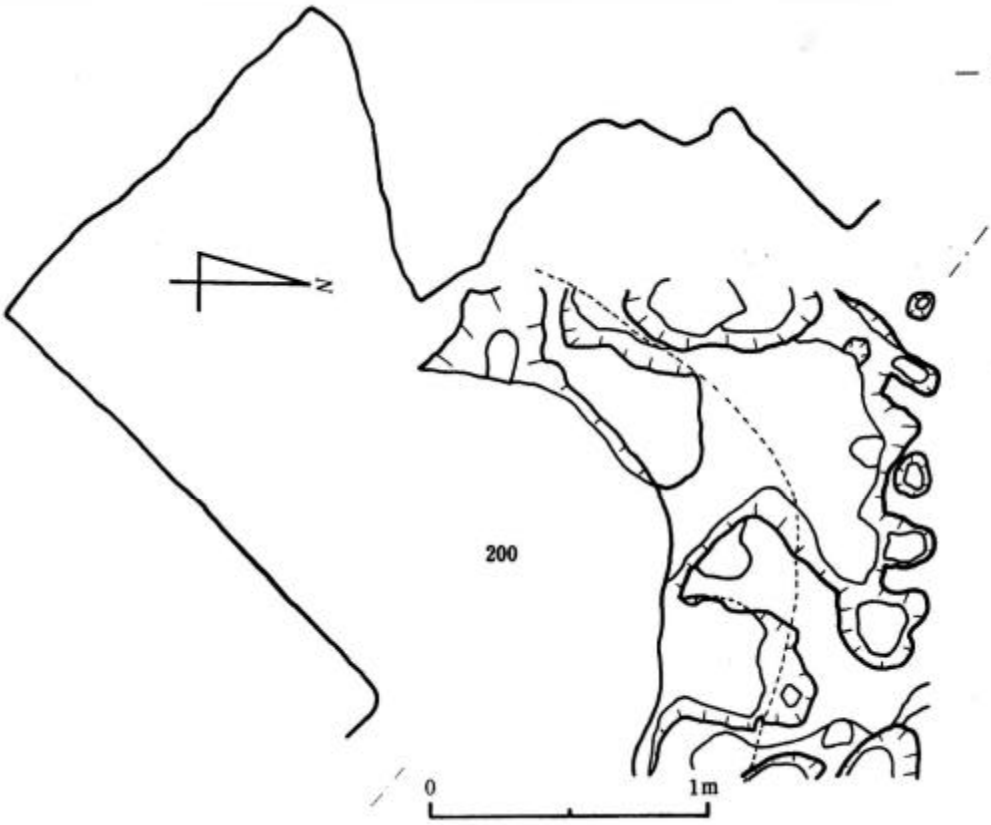
土　壙（11A 2）

グリッドの北側に位置する土壙で½程調査、口径240cm、底径250cm、深さは約120cmの袋状である。

（菅原）



第２図　　10A１グリッド土壙群



第3図　15J10　土　壙

土壙群（11A10、15J10）

11A10

表土より約20cm程堀り下げた黒色土層面の特に東側に多量の礫による配石が認められ、また土器も多量に出土している。遺構はこの黒色土層をさらに堀り下げたローム面に3基程確認されており、1基は配石を取り除いて確認され、東西220cm、南北210cmを測り、深さ約180cmの円形を呈するものである。配石は本ピットの上部に円を描く形であったが、この面でプランは確認できず、断面においても堀り込みの層は不明だったために本ピットとの関係はわからない。ピット内には、褐色土、黄白色砂層、礫が堆積しており底部はローム層を堀り込み、砂礫層まで達している。1基はこのピットの北西方向に位置し、北壁にかかって全面調査はできなかったが確認できた範囲で径約120cm、底径約150cmを測る袋状ピットが検出された。ピット内埋土は褐色土、黒褐色土のボソボソした土で、多量の土器が出土している。また上記した遺構の南西部に隣接して、もう1基の袋状ピットが検出された。前述の2基のピットより浅いものである。径120cm、底径130cmを測り、深さは約72cmである。埋土は粘性のある黒褐色土で、底部の壁ぎわや壁に貼りついた状態で拳大の礫や土器片が出土した。その他のピットについてはどのような性格をもつものかは不規則であり、また、各ピットの関係は不明である。これらのピットは深さ5～30cm位のもので、円形あるいは楕円形を呈し、東側に確認された袋状ピットより切られているものもある。これらのピット中より遺物は出土していない。

15J10

11A10グリッドの北西部に2×2mのグリッドを設定して調査を行なった。その結果、発見された遺構は袋状ピット1基と不明の落ち込み、その他、浅いピットである。袋状ピットについては、グリッド南側、表土より約40cm下のローム面に確認された。確認された範囲内での径は約200cm、底径約290cmを測り、深さは約200cmを測る。東側においては深さ50cm位の所まで内傾し、くびれを作っており、そこか

ら外側に張り出しているが、北側にはくびれはなく底部までまっすぐ外傾している。ピット内の堆積土は大別して２層に分れる。黒土とロームが混った土がそのほとんであるが底部までの20cm位は純粋に黒が埋っている。全体に粘性の強いものである。本ピットは灰褐色の砂礫層まで達している。（石郷岡）

A地区住居跡（12B1・7B1）

住居跡南壁部分のローム面からの掘り込みは約60cmでほぼ垂直である。床面の状態は極めて良好であり、巾10～20cm、深さ５cmの周溝がめぐり、その周溝の内側には壁に接して巾10cm、深さ25～30cmの掘り込みがある。P_1は68×50cmの楕円で深さ74cm、中程に段をもち断面はロート状で、この住居跡の柱穴と考えられる。P_2は26×32cm、深さ44cm、P_3は15×15cm、深さ15cmを測る。調査区の東端に床を10cm前後掘り下げた部分があり、焼土も厚く堆積していたことから、炉跡と考えられる。住居跡内、ローム面下の覆土の堆積状態は軟質の暗褐色土層が上面を覆い、遺物を包含した暗褐色土層の下に粘性の強い黄褐色土層、そして炭化物を密に含んだ層が床全面に５～８cmの厚さで堆積している。住居跡内の各所に焼土がみられ、特に壁ぎわに厚く堆積しており、床面より30cm上面まで炭化材が検出され、火災にあった住居跡と考えられる。

P_1にも炭化物と焼土が詰っていた。ローム上面には表土および軟質の暗褐色土層が覆っており、地表面から住居跡床面までは深さ120cm程である。ローム層掘り込み面より33cm離れた住居跡覆土上面に土器を伴う炉が検出された。炉は粘土で作られた面をもち、北側にやや傾斜して土器に接しており、火熱を受けて炉面下および土器のまわりにも焼土がみられた。この炉は住居跡廃棄後に作られた遺構と考えられる。（庄内）

ま と め

小阿地坂ノ上遺跡の分布調査は昭和49年度から３年計画の予定で始められ、今年度（第１次調査）の調査は全調査区の北部（A地区）の台地約30,000m²に対処し、三角点のある所を中心に実施したのである。

配石面は表土から40cm位の所で確認され、配石遺構および配石下の遺構の時期は縄文時代中期末葉から後期にかけての時期（大木10式以降～、堀之内併行式土器出土）と考えられる。調査区の中では三角点周辺約1,000m²は微高地になっている。小竪穴遺構については、はっきりした性格や機能、広がり、土壙群との位置関係は今後の調査によらねばならないが、遺構の形態、骨片の出土等により埋葬施設（土壙墓）としての可能性が強いと考えられる。配石については第１図に示したような分布が予想されるが配石そのものの規則性はみられず、住居跡、土壙、小竪穴遺構等との、それぞれの関連は把握できないが、遺跡の北側に隣接する下堤遺跡（縄文時代中期中葉～末葉）との関連も含めて今後の研究課題としていかねばならない。

なお、11D１、11E１グリッド（４×４m）については配石面まで調査し配石を確認したが配石下は未調査である。

11C２グリッド　No.２小竪穴遺構出土炭化物C_{14}年代

測定値：4370±260B.P.

測定番号：Gak—5370

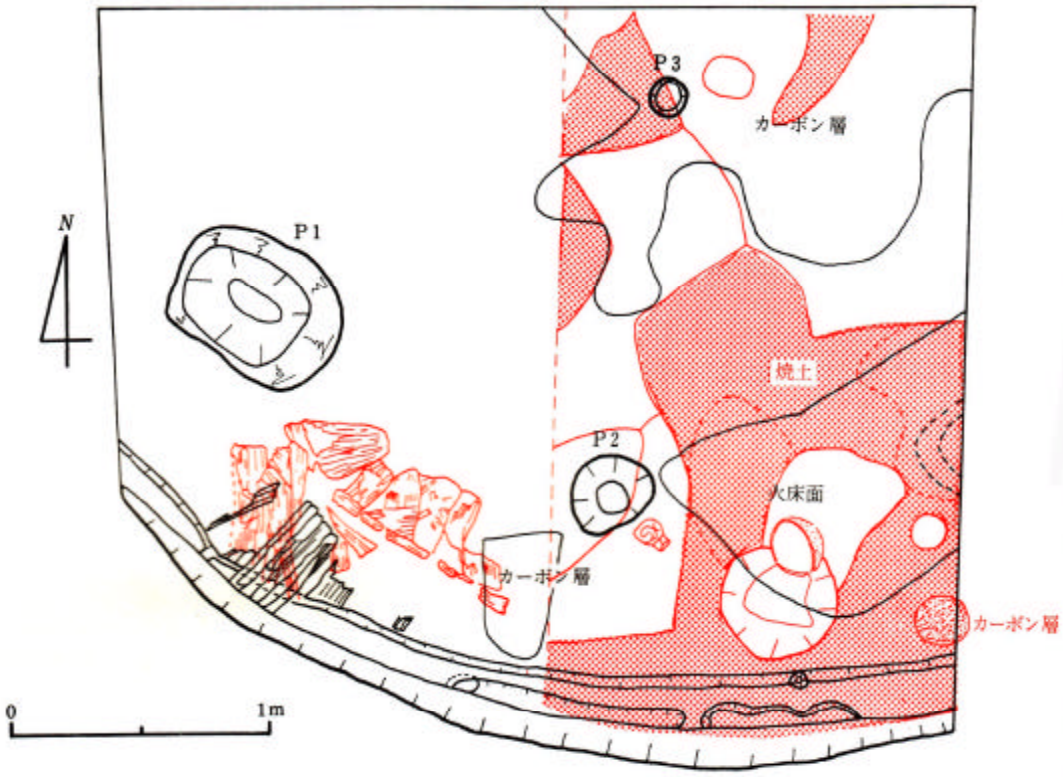
測定者：木越邦彦　　測定試料：木炭

採取者：小阿地坂ノ上遺跡調査員

採取年月日：昭和49年７月25日

採取地：秋田市四ツ小屋小阿地字坂ノ上

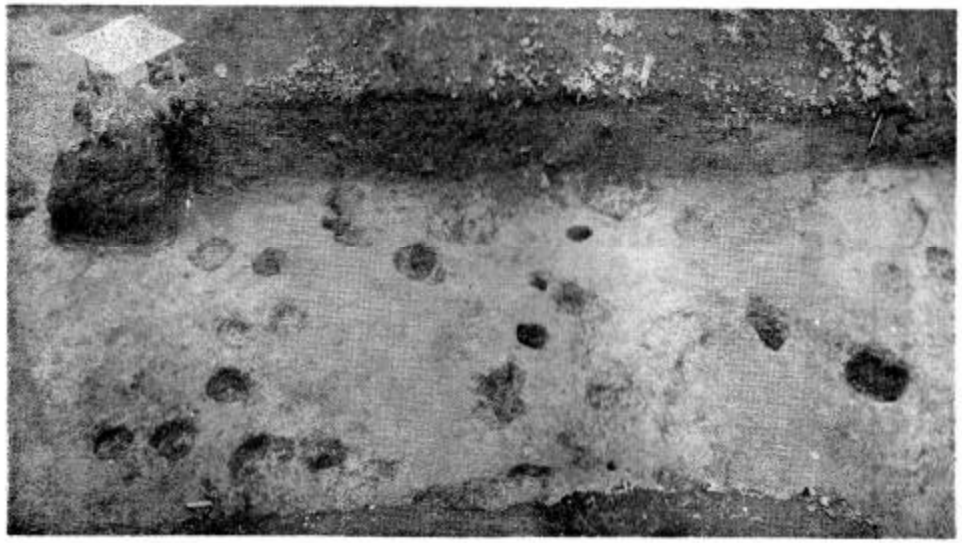
（菅原）



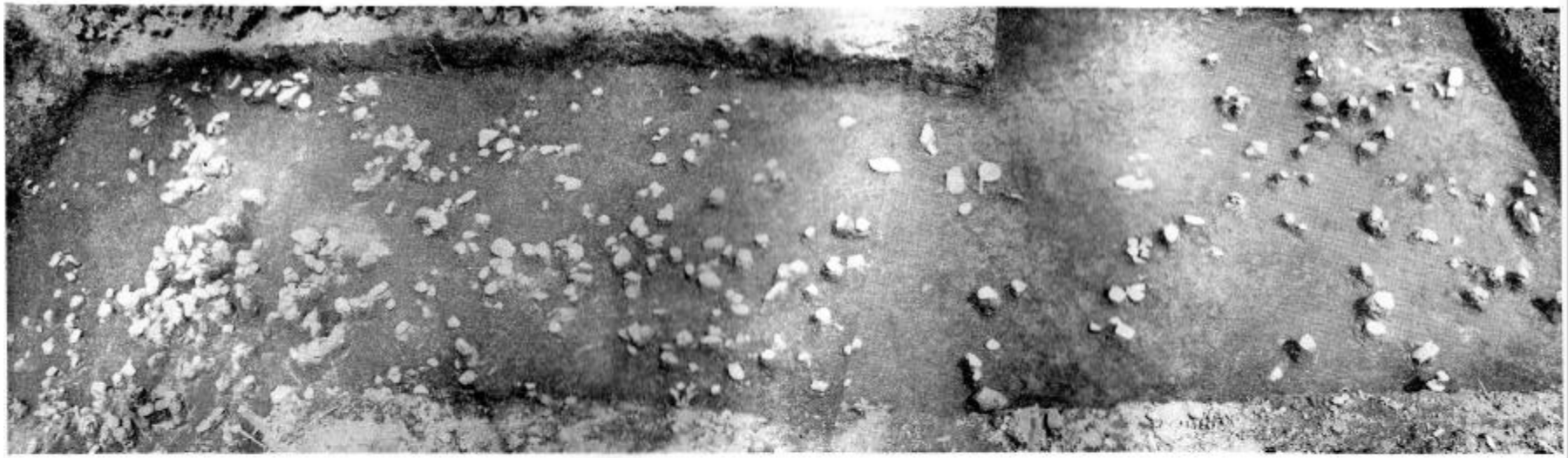
第４図　　Ａ地区住居跡（12Ｂ１．７Ｂ１）

Ａ地区住居跡（12Ｂ１．７Ｂ１）

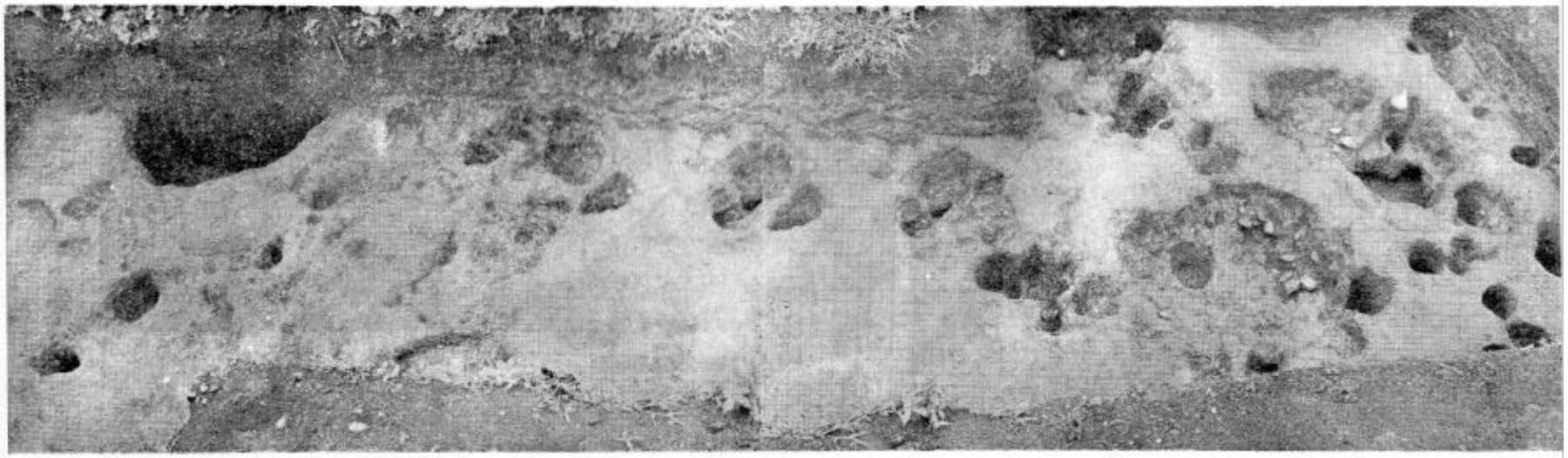
配石遺構、貼床住居跡
（5 J10．6 A10．11A 1．11A 2）



住居跡（11A 1）



配石遺構および小竪穴遺構、土壙（11A２．11B２．11C２）



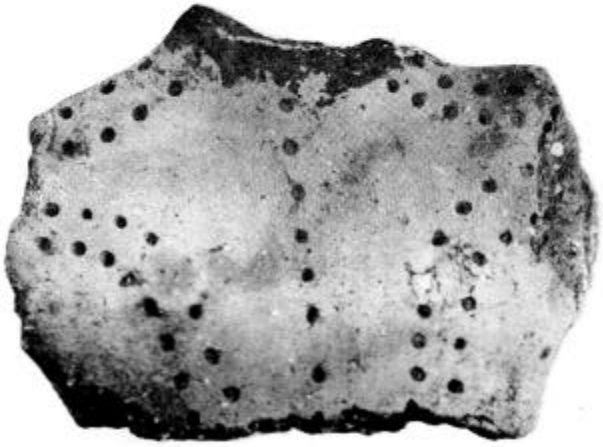
土壙群（11A10．15J10）

（5 J10．6 A10）出土

堀之内式併行土器

器高　42cm

口径　約20cm



5J 10　土　偶

11B 2　土　偶

7B 1　土　偶

12B 1　環状土製品

10A 1　三角形土製品

6J 10　三角形土製品

（実物大）

調 査 員 お よ び 参 加 者

発掘調査主体　秋田市教育委員会　秋田考古学協会

発掘調査期間　昭和49年7月1日～8月6日

調査指導員　日本考古学協会員　奈 良 修 介
　　日本考古学協会員　富 樫 泰 時

参 加 者

秋田考古学協会員　五十嵐芳郎　庄内昭男　進藤公子

秋田大学　学生　野上剛志　佐々木博史　菅野博仁　石川達夫　品山貞子　村岡百合子　三上礼子　長谷山とし子　尾張谷信子　近江谷幹子　安藤麻須子

明治大学　学生　田口　都

国学院大学　学生　高橋忠彦

福島大学　学生　蜷峨修平

県立金足農業高校　教諭　泉　哲郎

学生　佐藤昌行　安田忠市　三浦　薫　浜田忠雄　酒井喜美男　伊藤桂子　鈴木啓子　富樫富士子　菅原純子　草階耕悦　古屋久勝　佐藤　満　進藤　司　伊藤晴男　宇佐美幸子　加藤重光　藤原一男

県立秋田北高校　教諭　武田武志

学生　工藤恵子　大堤裕子　佐藤洋子　富岡伊穂子　田村慶子　高橋朱美　長沢しのぶ　石川奈保子　加賀谷真美　三浦美津子　佐々木貴子　菊地公子　沢井満子

敬愛学園高校学生　渡辺昭子

県立秋田高校学生　武藤康弘

地元協力者　鈴木銀一　鈴木金一　鈴木長治　岩崎岩五郎　鈴木茂治　堀井藤男　鈴木徳一郎　岩崎ミノ　伊藤ハルエ　堀井ヤス

事務担当　秋田市教育委員会　社会教育課　主査　佐々木　栄　孝
　　主事　菅　原　俊　行
　　主事　石郷岡　誠　一

昭和50年3月 発行　　発行者　秋田市教育委員会